

J・S・ミル『論理学体系』における帰納の正当化と自然の斉一性

京都大学大学院文学研究科 鈴木英仁

はじめに

『論理学体系』第3巻第3章「帰納の根拠」において、ミルは次のように述べる。

帰納とはなにかという言明それ自体のうちに含意されている原理がある。……一度起きたことは、十分な程度同様の状況のもとでは、もう一度、いや一度のみならず、同じ状況が生起するだけ起きる。わたしが思うに、これはあらゆる帰納の事例に伴う想定である。そして、我々が自然の実際の経過を調べたならば、この想定が正当化されるとわかるのである。宇宙は、我々が知る限りにおいて、なんであれ一つの事例について真であることは、特定の記述に当てはまるすべての事例で真であるように構成されている。(CW. VII, p. 306)

あらゆる帰納は、自然の経過は斉一であるという「自然の斉一性の公理」(CW. VII, p. 311)を前提としている。他方、この原理自体は、自然の経過を調べることによって、つまり観察に基づく帰納的探求によって正当化されるとミルは言う。

一見して、ここには明らかな循環が認められる。自然の斉一性が帰納を正当化すると同時に、帰納が自然の斉一性を正当化するからである。ここから、ミルの議論は、帰納を帰納的に正当化するという、ヒュームが批判した悪しき循環論法に陥ったものとみなされてきた。

他方、こうした解釈に異を唱える者もいる。スカールによれば、ミルはヒュームの「帰納の問題」を理解しておらず<sup>(1)</sup>、ミルが取り組んだのは、帰納そのものの正当化ではなく、妥当な帰納と妥当でない帰納を区別するプラグマティックな仕事であるという(Scarre 1989, p. 81)。スコラプスキもまた、ミルの目的は、「帰納の懐疑主義的問題に解決を提示すること」ではなく自然主義的な帰納の「内的正当化」(Skorupski 1989, p. 170)にあるとする。

こうした解釈は示唆的であり、わたしもとりわけスコラプスキに概ね同意する。しかし、先行研究では、あらゆる帰納に伴うとされる自然の斉一性そのもの、そしてこの原理と帰納との関係が十分に明らかにされていない。ミル自身、「自然の経過が斉一であるという命題」が「哲学的言語に求められる正確さ」(CW. VII, p. 311)を欠いていると評しているのだから、この点は問題であろう。先に引用した箇所単純な議論の見かけに反して、『論理学体系』第3巻全体で提示される帰納の正当化の議論は込み入ったものである。後に

論じるとおり、ミルは、自然の斉一性が単一の原理としてあらゆる帰納を一律に正当化すると考えていたわけではないし、帰納についても、その段階的な発展を視野に入れ、個々の段階の帰納と斉一性との間に複雑な関係を想定しているからである。

そこで以下では、『論理学体系』のテキストに基づいて、帰納と斉一性についてのミルの考えを明らかにし、ミルの帰納の正当化の議論を再構成することを目指す。はじめに、ミルの議論の一見した循環とヒュームの指摘を確認する（1節）。続いて、自然の斉一性についてのミルの議論を検討し、ミルが考える自然の斉一性と帰納との関係が、ヒュームの指摘した循環とは異なる構造を持つことを明らかにする（2節）。そののち、ミルが帰納の正当化のために自然発生的帰納に訴えかけていることを確認し、ミルの帰納の発展史の説明を検討する（3節）。最後に、この描像から明らかになるミルの帰納の正当化のプロジェクトの眼目を素描する（4節）。

## 1. ミルの帰納の正当化とヒュームの循環

冒頭で引用した箇所続く一節で、ミルは同じ趣旨を詳しく説明している。

自然の経過は斉一であるというこの命題は、帰納の基本原則、あるいは一般公理である。だが、この巨大な一般化をなんらかの帰納のプロセスの説明として提示するならば、それは大きな誤りである。反対に、わたしは、これ自体が帰納の事例であり、そして最も明瞭でない類の帰納の事例であると考えている。これは、我々がはじめになす帰納であるどころか、最後に厳密な哲学的精密性を獲得する帰納の一つである。……正しくは、この一般化それ自体が先行する一般化に基づいているのである。

(CW. VII, p. 307)

まず確認しておくとして、ミルにおいて帰納は、個別事例の観察に基づいて「一般命題を発見・証明する操作」(CW. VII, p. 284)と定義される。典型的な形態は単純枚挙による帰納(*induction per enumerationem simplicem*)である。すなわち、AはBであるという観察を集め、すべてのAはBであると結論する推論である。

ミルによれば、自然の斉一性の公理は帰納の「基本原則」である。冒頭で引用した箇所と併せて考えれば、あらゆる帰納が自然の斉一性を前提するということを意味しているとさしあたり解釈してよいであろう。しかし、基本原則であるはずの自然の斉一性は、それ自体一般化、つまり帰納によって知られるという。すると、ミルはここで、次の二つのことを同時に主張してい

るように思われる(cf. Skorupsuki 1989, p. 171)。

(1)あらゆる帰納の事例において自然の斉一性が想定されている。

(2)自然の斉一性は帰納に基づいてのみ知られる。

このミルの議論は、ヒュームが批判した循環論法であるとみなされてきた<sup>(2)</sup>。ヒュームが『人間本性論』で提示した議論の一般的な解釈によれば(Hume 2000, pp. 61-65; cf. Henderson 2022, sec. 1)、自然の斉一性の原理を帰納によって正当化しようとする試みは循環に陥る。たとえば、次のように自然の斉一性を正当化しようとしたらどうなるだろうか。我々はこれまで多くの帰納を成功させてきた。太陽が東から昇ることなど、様々な一般的事実を我々は知っている。これらの事例で帰納が成功してきたのは、世界が帰納を成功させるような仕方です——つまり斉一にできているからである。したがって、自然の斉一性は正当化される、と。しかし、ヒュームによれば、こうした議論は成功しない。というのも、この推論もまた帰納の事例であり、したがって自然の斉一性を前提としている以上、「同じ一つの原理が他のもの〔帰納〕の原因であると同時に結果であることは不可能」(Hume 2000, p. 63)であり、循環論法に陥るからである。

ミルの議論は、まさしくヒュームが指摘した循環論法に思える。しかし、わたしの信じるところでは、これは見かけだけの問題である。結論から先に言えば、ミルにおいて帰納は必ずしも自然の斉一性を前提としていないからである。以下このことを論じよう。

## 2. 斉一性と諸斉一性

まず、帰納が自然の斉一性を前提とするとはいかなる事態か、ミルの説明をみよう(CW. VII, pp. 307-311)。ミルは、演繹はすべて三段論法の形式で表現可能であると考えていたが、帰納もまた、隠れた大前提を補うことで三段論法として表現できると考えていた。そして、ここで補われる大前提こそが自然の斉一性の公理である。たとえば、「ジョンは死ぬ、ピーターは死ぬ、その他の人間は死ぬ、したがってすべての人間は死ぬ」という帰納は、次のように表すことができる。

大前提 自然は斉一である。

小前提 ジョンは死ぬ、ピーターは死ぬ、そのほかの人間は死ぬ。

結論 すべての人間は死ぬ。

しかし、ここでミルは重要な補足を行う。自然の斉一性の公理は、この帰納の究極的大前提であるかもしれないが、直接の大前提ではない、とミルは

言う(CW. VII, p. 309)。というのも、この帰納が実際に行われる際に補われる前提は、より具体的なものだからである。つまり、次のような三段論法になる。

**大前提** ジョンやピーターやそのほかの人間について真であることはすべての人間について真である。

**小前提** ジョンは死ぬ、ピーターは死ぬ、そのほかの人間は死ぬ。

**結論** すべての人間は死ぬ。

この推論の大前提は、宇宙全体が斉一であると述べるものではなく、ジョンとピーターとそのほかの人間たちが持っている性質は人間すべてが持っているであろう、というタイプとしての人間に関する個別的な斉一性を述べている。考えてみれば、人間に関する帰納が妥当であるために、宇宙全体についての斉一性を前提とする必要はない。上の例が示すように、人間についての部分的斉一性だけで十分である。このことは次の註で明確に述べられる。

とはいえ、自然の経過のうちに斉一性が存在することは、あらゆる帰納の妥当性の条件であるけれども、その斉一性が自然全体を覆うものであることは必要条件ではない。その帰納が関係するところの特定の現象のクラスを覆っていれば十分である。天文学の現象や磁石の現象が一般法則の支配下にあると想定されていれば、風や天気は偶然の産物であると我々が想定しても、惑星の動きや磁石の性質に関する帰納が損なわれることはないだろう。(CW. VII, p. 310)

加えて、この引用で風や天気について述べられるとおり、自然は一定斉一であると同時に「無限に多様」(CW. VII, p. 311)であるという事実も見逃してはならない。ミルの挙げる例から天気について考えよう。今週の月曜日から金曜日までは晴れ、土曜日と日曜日は雨だったとしよう。この観察から、来週も同様に平日は晴れ、週末は雨が降ると推論する者はいないだろうし、その通りになったとすればむしろ珍しがらざるはずである。我々はたしかに世界のある事柄については斉一性を想定するけれども、あらゆる現象についてそうするわけではない。

これらの考察から、ミルは次のように結論する。一般的な自然の斉一性——宇宙全体の斉一性——は、単数形の斉一性(the uniformity)ではなく、複数形の諸斉一性(the uniformities)として考えなければならない。宇宙全体の規則性は、部分的な規則性が集まった共存の結果であり、自然の経過一般が一定なのは、自然を構成する多種多様な現象のそれぞれの経過が一定だからなの

である(CW. VII, p. 315)。

以上のミルの洞察は——ミル自身が意図したかはともかく——ヒュームの議論に対する一つの批判になっている<sup>(3)</sup>。ヒュームは、あらゆる帰納が、自然の斉一性の原理という単一の想定を持つと考えたのだった。それゆえ、自然の斉一性を証明しようとする推論もまた当の原理を前提とするため、循環が生じた。しかし、ミルの議論が正しければ、個別の帰納は宇宙全体についての想定ではなく、その推論にかかわるだけの個別的な斉一性を前提としているのだから、想定される斉一性はそれぞれ異なる。だとすれば、帰納と(単一の原理として想定された)一般的な自然の斉一性との間に単純な循環の関係が生じるとは言えないだろう。

とはいえ、問題はここでは終わらない。個別の帰納の事例は、妥当性のために、部分的斉一性を前提としているのだった。「その帰納が関係するところの特定の現象」に関する斉一性の存在は、「帰納の妥当性の条件」(CW. VII, p. 310)である。だとすれば、ある帰納が行われるに際して、その帰納に関係するだけの部分的斉一性が知られていなければならぬだろう。この斉一性はどのようにして知られるのか。ミルの答えは次の一節に見られる。

ジョンとピーターとそのほかの人間とについて真であることはなんでもあれすべての人間について真であるということの真正の証明は、これと異なる想定をしたならば、自然の経過のうちに存在すると我々が知っている斉一性と食い違う(inconsistent)だろうということにほかならない。

(CW. VII, p. 310)

ミルによれば、個々の帰納において部分的斉一性を想定することの妥当性は、既に知っている斉一性に基づいて、それと「食い違う」かどうかで判断されるという。この記述がなにを意味しているか理解するため、ミルが挙げる二つの枚挙的帰納の事例を比較しよう(CW. VII, p. 310)。第一の例は、白鳥についての帰納である。ヨーロッパ人は、これまで観察した白鳥がすべて白かったという根拠から、長きにわたってすべての白鳥は白いと信じてきた。しかし、17世紀に黒い白鳥が発見され、この結論は誤りだと明らかになった。第二の例は、人体の構造についての帰納である。我々は、これまで観察してきた人間はすべて肩より上に頭があったという根拠から、すべての人間は肩より上に頭があるという結論を導き、その妥当性を確信している。

これら二つの帰納の事例は、それぞれ次のように表すことができる。

前提：これまで観察された白鳥はみな白かった。

結論：すべての白鳥は白い。

前提：これまで観察された人間はみな肩より上に頭があった。

結論：すべての人間は肩より上に頭がある。

明白なことだが、二つの帰納を形式的に区別することはできない。形式的には同じ推論であるのに、なぜ我々は後者により高い妥当性を帰属するのだろうか。ミルの答えは次の通りである。

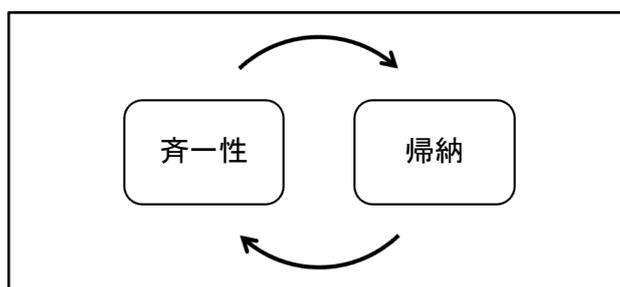
明らかに、それは、動物の生体組織の一般構造よりも、その色のほうが恒常性が小さいからである。しかし、我々はいかにしてこのことを知るのであるか。疑いようもなく経験からである。したがって、次のことは明らかである。我々は、いかなる程度で、いかなる事例で、あるいはいかなる種類の事例で経験を信頼してよいのか、経験に教わる必要がある。

(CW. VII, p. 319)

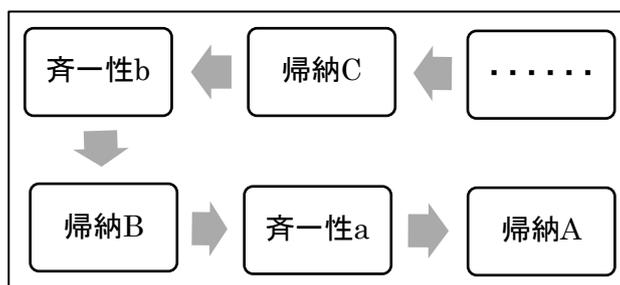
白鳥の色についての帰納よりも、人体の一般的構造についての帰納のほうが妥当であることは、経験によって知られるとミルは言う。詳細な記述はないが、ミルが意味しているのは次のようなことだと推測できる。我々は、この二つの帰納をなす前に、様々な自然界についての知識を持っている。その中には、次のようなものが含まれるだろう。たとえば、ニワトリには白いものと茶色いものがあることや、ヤギにも様々な毛色のものがあることを我々は知っている。これらの知識からして、たとえ我々が白い白鳥しか見たことがなかったとしても、そこに斉一性を想定してよいかは相対的に明らかでない。他方、我々は、たとえば6本足のヤギや、頭から翼が生えているニワトリはまったく見たことがなく、これらの動物について、体の一般的な構造の共通性が見出されることを知っている。仮に人体の一般構造に斉一性がみられないとすれば、動物の体の一般構造に関する、既に知られた多数の斉一性と食い違ふだろう。したがって、人体に関する部分的斉一性——これまで観察してきた人間の体の一般構造に当てはまることはすべての人間に当てはまる——は相対的に確からしいはずである。このように、我々は、帰納が想定する斉一性の確からしさを、これまでの経験から判断するのである。

しかし、いまだ疑問は残る。個々の帰納は、既に知られた部分的斉一性、そしていうなれば経験的な背景知識に基づく。人体の帰納の例ならば、その妥当性は、動物に関する既知の斉一性に依存している。それでは、この背景知識はどのように知られたのだろうか。言うまでもなく、別の帰納の事例からであろう。個別的な帰納の事例は、その帰納に必要な範囲での部分的斉一性を前提とする。しかし、ここで前提とされる部分的斉一性もまた、帰納によって導出されたはずである。そうであるとすれば、この部分的斉一性を導

出した帰納もまた、その帰納に必要な限りでの部分的斉一性を前提としている……。ここで起きているのは、ヒュームが指摘した循環ではないだろう。個々の帰納が前提としているのは個別の部分的斉一性であるが、この部分的斉一性は別の帰納に基づくのだから、循環は起きていない。生じているのは、個別の帰納とその妥当性を支える部分的斉一性、そしてその部分的斉一性を導出する個別の帰納、それが前提とする部分的斉一性……という、正当化の連鎖の遡行である。図式化すると次の通りである（図 1、図 2）。



(図 1)ヒュームの循環



(図 2) ミルの遡行

### 3. 自然発生的帰納から科学的帰納へ

前節の最後に残ったのは、帰納と部分的斉一性の正当化の連鎖が遡行するという問題であった。この連鎖が無限に遡行するとすれば、循環が遡行に置き換わったとしても、帰納の正当化についての懐疑は残り続けるだろう。この問題にたいするミルの解答は、『論理学体系』第 3 巻第 4 章と第 21 章に見出すことができる(4)。

ミルの応答が端的に表れているのは次の一節である。

信頼に値する帰納がいくらかなされてきたという仮説なしには、いかなる帰納の科学的方法も、帰納の正確さの基準も形成することはできない。

(CW. VII, p. 319)

我々が少なくともいくつかの信頼のおける帰納をなしてきたという「仮説」が要請されるとミルは言う。前節までの検討からして、この点については多言を要さないだろう。枚举的帰納はその帰納にかかわる限りでの部分的斉一性を前提としているが、その部分的斉一性を前提とすることの妥当性は、既に知られた斉一性をもとに決まるのであった。だとすると、無限遡行を回避するためには、それ自体で一定正当化されている斉一性が少なくともいくつか手に入っていると——「自然の中に存在する斉一性の広く行き渡った性格についての一般的知識を我々が保有している」(CW. VII, p. 319)と——考えるほかない。しかし、この主張を詳しく検討する前に、やや回り道的ではあるが、先の引用箇所でいわれる「科学的帰納(scientific induction)」(CW. VII, p. 318)と、それに先立つ「前科学的帰納(prescientific induction)」(Macleod 2014, p. 153)がいかなるものか、そしてどのように前科学的帰納が科学的帰納へ発展するのか、確認しよう。

まず、前科学的な帰納とは、これまで検討してきた枚举的帰納のことである。その中でも、ミルが帰納の最初期段階に位置づける「自然発生的帰納(spontaneous induction)」(CW. VII, p. 318)については次の説明がわかりやすい。

現象間に存在する斉一性の多くは、何度も繰り返され、したがって頻繁な観察に開かれているので、無意識的に認知されることになる。いくらかの事実は、絶え間なく、密接にほかの事実に随伴して生じるので、人類はまるで子どものように、一方を見出すところでは他方を予期するようになる。(CW. VII, p. 318)

ここに示されているのは、粗野な枚举的帰納の連合心理学的分析である。連合心理学とは、「あらゆる精神現象を連合の法則によって結びついた感覚の観念に分解する理論」(CW. IV, p. 312)であるが、ここでミルは、推論を精神現象として捉え、心理学的に分析している。りんごを食べると甘い味がするという現象の継起を例にとるならば、りんごの観念と甘味の観念が密接に連合し、りんごの観念を思い出すと甘味の観念が自然に思い出されるようになる、ということである。注意すべきは、この自然発生的帰納は、単なる観念の連合の所産であるために、理性的な反省がなされていないことである。実際ミルは、こうした原初的帰納は動物にも可能だと述べている(CW. VIII, p. 664)。

他方、科学的帰納は、枚举的帰納が発展した形態であり、「消去法(methods of elimination)」(CW. VII, p. 392)と呼ばれる。消去法は、現象の原因候補

を集め、候補を消去していくプロセスであるために消去法と呼ばれる。有名な「ミルの方法」はミルが提示した消去法のリストである。重要なのは、あらゆる科学的帰納の「妥当性は、すべての出来事、あるいはすべての現象の始まりはなんらかの原因を持っているに違いないという想定」(CW. VII, p. 563)、つまり「普遍的因果性の法則」に依存していることである。そして、この普遍的因果性の法則こそ、「最後に厳密な哲学的精密性を獲得する」(CW. VII, p. 307)とされた一般的斉一性である。一般的斉一性は、前科学的な枚挙的帰納によって得られた個別的斉一性を一般化することによって知られる。普遍的因果性の法則は「それ自体帰納の事例」であり、「より一般性の低い多数の法則からの一般化」(CW. VII, p. 567)なのである。ここまで示された帰納の分類をまとめると次のようになる(表1)。

帰納の種類	想定する斉一性
前科学的帰納(枚挙的帰納)	部分的斉一性
科学的帰納(消去法)	普遍的因果性の法則

(表 1)

したがって、ミルの考える帰納のプロセスの発展は次のようになる。第一に、自然発生的な帰納がなければならない。我々は、ある現象の継起を何度も経験することで、現象間の結びつきを無反省的に認識するようになり、それによっていくらかの部分的斉一性が得られる。第二に、やや洗練された枚挙的帰納があらわれるだろう。この段階では、無反省的な帰納によって知られた部分的斉一性を手掛かりに、個々の枚挙的帰納の信頼性が判断されつつ、様々な部分的斉一性が知られることになるだろう。そして、これに伴って原因と結果の観念が生まれ、部分的な因果的斉一性を獲得していくなかで、原因と結果の結びつきが一般的に存在するという普遍的因果性の法則が知られる。こうして因果性の存在が確立されたあとで、消去法という科学的帰納が立ち現れる。

#### 4. 帰納の帰納的自己改善

以上、自然発生的帰納から科学的帰納へといたる、ミルによる帰納の発展史的説明をみてきた。ここまでで明らかなおり、ミル的な帰納の発展は、出発地点にあたる自然発生的な帰納の確からしさに依存している。しかし、我々はなぜ粗野な帰納を信頼してよいのだろうか。自然発生的な帰納がそもそも誤ったプロセスであったとしたら、それに続く発展的な帰納も系統的に誤っていることにならないだろうか。

この疑念にたいするミルの応答は、次の一節に見られる。

たしかに、もし単純枚挙による帰納が妥当でないプロセスであるとしたら、このプロセスに基づくいかなるプロセスも妥当ではありえないだろう。それは、もし我々の目が信用できないとしたら、望遠鏡になんの信頼もおくことができないのとまったく同じである。しかし、妥当なプロセスは、妥当であるとしても可謬的な(*fallible*)ものであり、まったく異なる程度において可謬的である。それゆえ、我々が、より可謬的な形態のプロセスをより可謬的でない形態のプロセスで置き換えられたとしたら、我々は実質的な改善をなしたことになるだろう。そして、これこそ科学的帰納が実際にしてきたことなのである。(CW. VII, p. 568)〔強調追加〕

ミルはここで三つのことを主張している。(1)帰納が可謬的な、つまり誤る可能性のあるプロセスであるということ<sup>(6)</sup>、(2)帰納は可謬的であるが、その形態によって誤りやすさの度合いに程度があること、そして(3)科学的帰納が行うのは、可謬的なプロセスをより誤りづらいプロセスに置き換えることだ、という主張である。

しかし、可謬性に程度があるという主張は、そもそも、自然発生的帰納、つまり単純な枚挙的帰納が少なくとも一定の妥当性を有することを前提しているように思われる。ここで、ミルが自然発生的帰納への信頼を「仮説」と呼んでいたことに注意しよう。つまりミルは、自然発生的な帰納の妥当性が皆無であるかもしれないと主張する純粋な懐疑論にたいしては、反論するすべを持っていないし、その必要も認めていないのである<sup>(5)</sup>。「食べ物が栄養を与えること」の一般化が「信頼に値しないというのは馬鹿げている」(CW. VII, p. 568)。単純枚挙による帰納は「実践的に証明に相当する」(CW. VII, p. 312)のであり、「通常の行動の指導にとって十分な保証を提供してくれる」(CW. VII, p. 568)。我々は、実践上の、生活上の必要から、世界の経験的探求を取りやめることはできない。この意味で、自然発生的な帰納への信頼は、不可欠であると同時に究極的な根拠づけを欠いている。つまり、自然発生的な帰納は、信頼すべきというよりも、信頼せざるをえないものなのである<sup>(7)</sup>。

ミルは、自身のこうした方法論を、デカルト的なそれと対比させて次のように述べる。

最も科学的な手順でさえ、人間知性がプリミティブに、科学に導かれることなく進めてきた手続きを改善した形態でしかありえない。より厳密で確かな……方法にしたがって現象を研究しようという考えを人類が最

初に形成したとき、彼らは、これまでなにも確かめられてこなかったという想定から出発せよ、という志は素晴らしいが実行不可能なデカルトの指令にしたがってそうしたのではなかった。(CW. VII, p. 318)

このミルの主張は、アприオリな知の基礎づけを目指さないというミルの経験論と地続きである(8)。このことは、『論理学体系』第6巻冒頭で最も明示的に示されている。

証拠の原理と方法の理論は、アприオリに構成されるのではない。我々の理性能力の法則は、ほかのあらゆる自然の作動因の法則と同様に、それが実際にはたらくところを観察することによってのみ知ることができる。黎明期の科学の成果は、いかなる「科学的方法」をも意識せず、遵守せず生み出された。そして、我々は、事前に多くの真理を確かめていなかったならば、どのようなプロセスによって真理を確かめられるのか知らなかったに違いない。(CW. VIII, p. 833)

我々は、前科学的で無反省的な帰納を信頼して科学的な帰納の方法を形作ることを試みる。それは、究極的には、我々が自然的な存在者だからである。つまり、我々がどのように世界について探求してきたかという事実も、そしてそのプロセスが成功するものであるかどうかも、経験によってしか知ることができない事実なのである。この意味で、帰納についての研究は、帰納についての帰納、ないし一般化についての一般化という方法によってではかありえない。そして、我々に可能なのは、この可謬的なプロセスを、経験に基づいて、時間をかけ漸次的に、絶対ではないけれどもより誤りづらいプロセスに発展させていくということではかしかない。我々がこれまで行ってきたプロセスを観察によって明らかにし、それをさしあたり信頼したうえで、そのプロセス自体を修正する。これがミルの擁護する——そして我々に唯一可能な——帰納の帰納的自己改善という構想である。

## おわりに

これまでの議論をまとめよう。第一に、ミルによれば、個別的な帰納は、ヒュームの言うように宇宙全体を覆う斉一性ではなく、個別的な斉一性を前提としている。この主張によって、帰納の正当化の問題は、循環ではなく遡行の問題に移し替えられた。第二に、この正当化の遡行を止めるため、ミルは自然発生的な帰納に訴えかけていた。ミルは、自然発生的な帰納を、探求の出発点として信頼せざるをえないものとして描き出す。この点で、ミルの帰納の正当化は、ヒュームの懐疑を正面から論難するものではない。そして

第三に、こうしたミルの帰納の正当化の方法を、自然的存在としての我々人間が無意識的に行ってきた推論を観察し、その方法と成果を可謬的なものとしてさしあたり信頼したうえで、帰納を帰納自体によって漸次的に改善していく、帰納の帰納的自己改善の構想として素描した。

今後の課題としては以下が挙げられる。第一に、ミル解釈上の問題としては、本稿で素描したミルの可謬主義的認識論を、『論理学体系』第2巻の演繹論や『自由論』の社会認識論と接続することが求められる。第二に、ミルの議論を、ヒュームの懐疑論的解決やスコットランド常識学派の議論と比較することが必要だろう。これらの諸点については稿を改めて論じたい。

## 註

- (1) ミルが様々な著作でヒュームに言及することからすると、スカールの見解は奇妙に思われるかもしれない。しかし彼によれば、ヒュームの帰納論が破壊的な懐疑論として解釈されるようになったのはトマス・グリーン以降のことであったという(Scarre 1989, pp. 100f.)。この点に関して意見の一致はないが(cf. Jacobs 1991, p. 70; Millgram 2009, pp. 184f.; 伊勢田 2018, pp. 70f.)、この思想史の問題には踏み込まない。
- (2) たとえばフマートンは、ミルは「単に帰納の帰納的正当化を提示して満足している」(Fumerton 2017, p. 196)と言う。また伊勢田は、ミルの議論を「ヒュームがやり玉に挙げた考え方を、100年以上もあとに芸もなくそのまま提示している」(伊勢田 2018, p. 71)と評する。
- (3) 個々の帰納が依拠するのは単一の原理ではなく個別的な経験的想定だというミルの洞察は、ノートンやオカーシャの議論の先取りとみなせる(Norton 2003, pp. 649–653; Okasya 2005, pp. 250–253)。
- (4) 以下注目する自然発生的帰納については、既にマクロードやスコラプスキが言及している(Macleod 2014, pp. 152ff.; Skorupski 1989, pp. 194f.)。ただし、マクロードは帰納の正当化の全体構造について論じておらず、スコラプスキはミルの帰納の正当化の議論を循環と特徴づけている(Skorupski 1989, p. 195)。自然発生的帰納への信頼が要請される背景を新たに明示した点に本稿の貢献がある。
- (5) この点で、ミルが懐疑論の論駁を意図していないというスカールの解釈は正しい。しかし、ミルは「帰納推論の基本的な妥当性」を「まったく疑問に付していなかった」(Scarre 1989, p. 82)のではない。一旦自然発生的帰納が探求の出発点として措定されたなら、それを足場にして、そのプロセス自体の妥当性を吟味しなければならないからである。実際ミ

- ルは、地球外の惑星において帰納がまったく信頼のおけないものとなる可能性を認める(CW. VII, p. 574)。帰納が成功するかは経験的な問題であり、一方の可能性をアプリアリに排除することはできないのである。
- (6) 帰納が可謬的である、つまり誤りうるとは、たとえば「すべての白鳥は白い」という斉一性を帰納によって導出したにもかかわらず、反例（黒い白鳥）が発見されうるということである。ミルにおける帰納の改善は、第一義的には、枚挙的帰納というこの意味で誤りやすいプロセスが、科学的帰納という誤りづらいプロセスに漸次的に置き換わることを意味する。加えて、晩年の著作である『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』では、個別的な斉一性と一般的な斉一性が相互に支え合い、帰納のプロセス全体の確実性が増していくというホーリズム的な描像が提示されている(CW. IX, p. 452)。この論点については匿名の査読者の方から有益な示唆をいただいたが、紙幅の都合上詳細に論じられないことをお断りする。
- (7) 註 8 でも記すように、スコラプスキはミルと 20 世紀の自然主義的プラグマティストとの共通性を強調するが、自然発生的帰納への信頼が実践上要請されるという論点には触れていない。
- (8) スコラプスキはここに、個別科学に先立ちそれを基礎づける第一哲学の拒否を見出し、ミルの議論をクワイン的な自然化された認識論の先駆けとみるが(Skorupski 1998, pp. 192–195)、山本が指摘しているように(山本 2010, p. 7)、こうした解釈には慎重さが必要である。ミルは、事実を述べる「サイエンス」からは区別される、規範を述べる「アート」に言及しており、少なくとも、認識論が心理学の一章になるとする前期クワインの立場とミルのそれを同一視することはできないからである。

## 文献表

ミルの著作の引用・参照はすべて『トロント大学版ジョン・スチュアート・ミル著作集』(*Collected Works of John Stuart Mill*, J. M. Robson ed., University of Toronto Press, 1963–1991)から行い、著作集の巻数・頁数を記している。

Fumerton, Richard (2017) “Mill’s Epistemology,” in Macleod, Christopher and Dale E. Miller eds., *A Companion to Mill*, Wiley Blackwell, pp. 192–206.

Henderson, Leah (2022) “The Problem of Induction,” *The Stanford En*

*cyclopedia of Philosophy* (Winter 2022 Edition), Edward N. Zalta & Uri Nodelman eds., URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2022/entries/induction-problem/>>.

Hume, David (2000) *A Treatise of Human Nature: Being an Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects*, Oxford University Press. [木曾好能訳『人間本性論 第1巻 知性について』法政大学出版局, 1995年.]

Jacobs, Struan (1991) “John Stuart Mill on Induction and Hypotheses,” *Journal of the History of Philosophy*, Vol. 29, No. 1, pp. 69–83.

Macleod, Christopher (2014) “Mill on the Epistemology of Reasons: A Comparison with Kant,” in Loizides, Antis ed. *Mill’s A System of Logic*, Routledge, pp. 151–169.

Millgram, Elijah (2009) “John Stuart Mill, Determinism, and the Problem of Induction,” *Australasian Journal of Philosophy*, Vol. 87, No. 2, pp. 183–199.

Norton, John D. (2003) “A Material Theory of Induction,” *Philosophy of Science*, Vol. 70, No. 4, pp. 647–670.

Okasha, Samir (2005) “Does Hume’s Argument Against Induction Rest on a Quantifier-Shift Fallacy?” *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol. 105, No. 2, pp. 253–271.

Scarre, Geoffrey (1989) *Logic and Reality in the Philosophy of John Stuart Mill*, Kluwer Academic Publishers.

Skorupski, John (1989) *John Stuart Mill*, Routledge.

——— (1998) “Introduction,” in Skorupski, John ed. *The Cambridge Companion to Mill*, Cambridge University Press, pp. 1–34.

伊勢田哲治 (2018) 『科学哲学の源流を辿る—研究伝統の百年史—』, ミネルヴァ書房.

山本圭一郎 (2010) 「J・S・ミルの実践哲学：実践の論理と倫理」, 博士論文, 京都大学文学研究科.